ケセラセライ・1

らら　れーこ

けせらせらぃ　1

http://p.booklog.jp/book/34564

著者：らら れーこ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirano16/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/34564

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/34564

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

目次

第一章.....あの時

第二章.....恐怖の正体

第三章.....教室から消えた・・・

あの時

今は昔、ほんの数年×ほんのちょっと

私だって女子高生でした。

学校には毎日、早苗ちゃんと駅の改札で待ち合わせ

いっしょに行く日々でした。

そう・・・あの時も

早苗ちゃんは、先に待ち合わせ場所に到着し

私を待っていてくれました。

「さなえ～！」

早苗ちゃんがいる事に気付いた私は、大声で叫び

手を振りながら走って近づいて行きました。

そして・・・下を見ていた早苗ちゃんが私の声に気付き

顔を上げた瞬間

「ヒ～！　」と奇声をあげて倒れてしまったのです。

私はただただびっくり。

助けたくても、医学的知識はまるでなし。

集まって来た人たちは、みんな遠巻きに見てるだけ。

私は「さなえ！　さなえ！　どうしたの？　大丈夫？」

何度も何度も叫びました。

一死んじゃったらどうしよう・・・

悪い事ばかりを考えます。

「救急車呼ぶ？　ねえ、救急車呼ぼうか？　」

そう言った私を、手を横に振り拒否。

何か言いたそうでも呼吸がひきつり言葉が出ない状態。

どう考えてもやばいっしょ。

思いっきりあせる、私。

顔を隠してうずくまる早苗ちゃんの顔を必死で覗き込んでみました。

白目をむいて泡を吹いているかもしれない・・・。

そう思うと、私だってどうしたらいいのかわからず涙目です。

しかし・・・笑ってる。

覗き込んだ早苗ちゃんの顔は

涙をぼたぼた垂らして・・・笑ってる。

突然何か重症の発作を起こして、倒れたと思っていた早苗ちゃんが

笑い過ぎて苦しんでるじゃあありませんか。

Why？　私はまったく理解できません。

ひきつったように声にならない声で

「れーこ！　足！　足！　」

かすかにそう聞こえました。

何気に私は自分の足元を見ました。

そこには虫とかトカゲとか妙なものがいるのかな？

くらい思いながら。

でもでもでもでも

「ぎゃ～！！！　」

私はロミオとジュリエットのラストシーンのごとく

早苗ちゃんに重なるように倒れこみました。

二人の女子高生が、折り重なってがっつり倒れてる光景って

あんまり見ない気がするけど

それを結構大きめの某駅改札でやっちゃった。

早苗ちゃんは笑いが止まらず、

私はあまりのショックでパニック。

先にムックリ起きた早苗ちゃん

優しく(かな？)手を差し伸べて、私を起こしてくれました。

ふと気付くと、私たちは太郎さんと次郎ちゃんの猿回しみたいに

大衆に囲まれておりました。

笑ってる・・・みんな笑ってる。

私は、定期も見せずに、改札を猛ダッシュで走り抜け

トイレに駆け込んで行きました。

駅員さんは、すべてをご覧になっていたのでしょうか。

改札を駆け抜ける私を追いかけず、顔パスのごとく見逃してくれました。

私がきったないトイレにしゃがみ込んでいても

トイレに入って来た数人は、知ってか知らずか見てみふり。

私は、見知らぬ方々の素っ気ない優しさや

駅員さんの改札素通りを見逃してくれたことも

感謝する余裕なんてありません。

だって、みんなが私を見てる。みんな心の中で笑ってるって、

私の被害妄想は、あの時大噴火しまくっていたもんで。

頭の中が、うぁあぁあうあぁ！　だったもんで。

私はそこで、黙ってはいていたパジャマのズボンを脱ぎました。

そう、私はパジャマのズボンを脱がずに、仕事に行く父の車に飛び乗り

そして、駅までノー天気に行っただけの事です。

家族が(私もだけど)、誰も気付かなかっただけの事です。

車をおりてから早苗ちゃんの所まで、

すれ違う人が誰も教えてくれなかっただけの事なんです。

早苗ちゃんがトイレに入って来ました。

もう笑ってないけど、一生懸命作ったポーカーフェイスです。

だって、たまに肩が震えてるもん。

「大丈夫だよ！　」

そう言ってくれた早苗ちゃん。

大丈夫じゃないって、震える肩は語っていました。

「冬だもん。寒いんだよ。だから、あたしはいつもすべての準備を終え

家を出る直前に、パジャマのズボンを脱ぐんだよ。でも、きょうは

家を出る瞬間に忘れちゃっただけだよ。それで仕事に行く父親を追いかけて

車に飛び乗り、駅前で降ろしてもらったんだから、気がつかなかったんだよ」って

言い訳したかったけど、口が渇いて声が出ず。

トホホ・・・

ジャージならよかった・・・

でも、不幸中の不幸にも

私がはいていたのは、小花柄で生地は厚手。

これがパジャマだ文句があるか！　ってやつでした。

それに、制服のスカートは膝までしかないくせに、パジャマは足首。

トホホ・・・

私は、学校に行きたくなくなり

学校を辞めたいと願うようになりました。

でもでも、時代は昭和。

「お母さん。あたし学校へ行きたくない！　」って

訴えたって通じやしません。

「わかったから、早く学校へ行きなさい！　」と追い出され

不本意ながら皆勤賞。

思春期というお年頃してたもんで

たまに今でいう**PTSD**ってやつが押し寄せてきました。

私はもしかしたら、ものすごこっ恥ずかしい事したのかも・・・って

ズボッとブラックホールに吸い込まれる事がありました。

忘れたくても忘れられない。

落ち込む私を元気づけてくれたのは

「そんなお前が俺は好きだ！　」って

告ってくれた早苗(女)ちゃん

時を同じくして、体操の授業の前の着替えの時

制服脱いだらパジャマ着てたしょうこちゃん

ありがとう！

つらい体験をした私は、悩みに悩んで１つの結論に達しました。

『まっ　いっか！　』って。

そう、解決できなきゃ『まっ　いっか！　』そう思うと、多少の無理があろうとも

すべてが解決に至ったのです。

とっても悩んだパジャマの事も、この発想で

青春の思い出の中のたった１つにすぎなくなりました。

すでに私の人格形成の根幹にあった

『考えなしの行動と、筋道の通った言い訳』に

この思想が加わると、怖いものも嫌なものも

すべてオブラートに包まれます。

そして私は、プラス年齢と経験で、心臓にいっぱい毛を生やしていくのです。

恐怖の正体

高校を卒業してからも、私は相変わらず高校の同級生

しょうこちゃんとつるんでいました。

私としょうこちゃんの家は近所でした。

二人の家の丁度中間地点あたりに人気がなくて

密会するのには絶好の公園があったのです。

そしてそこには、私たちのために税金で作ってくれたかのような

向かい合って座るベンチブランコがセッティングされていました。

まさに二人の秘密基地・・・いえいえ愛の巣ともいえる場所でした。

お互い時間が合えば

一日ず～～～～っと、このベンチブランコに座って

くっだらない話をして過ごしていました。

そしてこの話は、いつものように二人でこの場所で過ごしていた

夏の日の出来事です。

昔だったらお母さんが「〇〇ちゃ～ん！　ご飯よ～！　」って、

迎えに来てくれるよな、まったりとした夕方でした。

あたりには誰もいません。

いつものように二人は、ベンチブランコに向かい合って座り

いつものように二人は、くっだらない話をしていました。

しょうこちゃんが「ん？　」と言って後ろを振り返ったのです。

私は何気なく「どしたの？　」って尋ねると

「誰かが私の肩を叩いた！」と言うのです。

私たちは向かい合って座るので、しょうこちゃんの後ろは、

ベンチブランコに座った時からずっと見えています。

誰もいないって事は、私が**100**％保証します。

つまんない事して私を怖がらせようとしているのかと、

軽くあしらい、鼻で笑ってやりました。

「でもさ」と言って、何度も振り返る様子には

正直あきれておりました。

でも、しょうこちゃんは続けます。

「信じてもらえないとは思うけど、本当に誰かが私の肩を叩いたんだってば！
」

しょうこちゃんは、目に涙をためて

何度も「誰かが私の肩を叩いた！　」を繰り返します。

ちょっと尋常じゃないなっと私も思い始めました。

しばし沈黙・・・。

顔を見合わせていると

生あたたかい風がフワ~っと吹いてきたのです。

「ぎゃ～～～～！　」

我先に！　絶対こいつの後ろを走りたくない。

お互いそう思いながら同時にベンチブランコから転げ落ちるように逃げ出しました
。

たった二人で、大パニックです。

お互い肘で突付き合い、腕を伸ばして相手が自分を追い抜こうとするのを阻止。

後ろを走っていると、異次元の世界からニュッっと手が出てきて

別の世界へ連れて行かれるような、もの凄い恐怖に襲われました。

思いっきり走っているのに、息がぴったりできれいに並んで走る二人。

だけど、お互い自分の方が先頭を走りたいという思いはいっしょ。

これが競馬なら、歴史に残る名勝負です。

ギャラリーはいないけどね。

高校時代は、あきらかに私の方が足が速かったのです。

体育の授業で３キロマラソンのタイムを計っている時

「れーこ、待ってよ！　おいて行かないでよ！　」

「ちょっと、ずるいよ！　」

「薄情者！　」

「れーこぉ～～～！　」

叫び続けて無駄に体力を使い果たし、笑えるタイムをたたき出して完走。

先生に怒られていた奴です。私が負けるはずがありません。

最後は私がぶっちぎる。そう思っていたんだけど。

しょうこちゃんは火事場の馬鹿力で、ど根性を出しました。

得体の知れないモノに肩を叩かれた張本人だったから、

恐怖が私より勝ったのでしょうか。

じわじわと私より確実にスピードを上げて行きました。

隣を走っているのはわかるけど、最初はまったく視界に入らなかったしょうこちゃん。

私を微妙に追い抜きはじめ、だんだんと視界に入ってきたのです。

私だってスリラーの世界へさまよい込んだ恐怖です。

振り返ったら、顔が・・・腕が・・・足が・・・腐ったゾンビが追いかけて来る。

踊ってりゃいいのに、ちょっと宙を浮いて走って来る。

「怖いよ～」

必死に走りながらも、妄想は大暴走。

コンクリートの地面から、ヴァッと手が出てきて、足首をつかまるぅ。

そして、コンクリートの地面にズブズブと引きずり込まれていく。

そんな恐怖にかられます。

どうしても後ろを走りたくない。

でも、一生懸命走っているのに、

しょうこちゃんはあきらかに私より速いのです。

私は泣きたくなりました。

とうとう一馬身の差がつき、

しょうこちゃんの背中がはっきりと見えました。

そして・・・

「誰かが私の肩を叩いた！　」と大騒ぎした部分も

はっきりと見えてしまいました。

その瞬間、私の顔はボワッと軽く爆発し、それが噴射の合図となり

今度は私のスピードが上がっていきました。

「キサマ～～～！　」

私はしょうこちゃんの首根っこに飛びかかりました。

しょうこちゃんは、ゾンビに捕まったと思ったけど

飛びかかってきたのが私だと気づくと

私が悪霊に捕り憑かれてしまったと思ったようです。

「やめて～！　」

凄まじい悲鳴で助けを求めていました。

誰もいないけどね。

「やめるのは、お前じゃあ！　」

私も訳のわからない事を叫びます。

そしてしょうこちゃんの着ていた**T**シャツの

「誰かが私の肩を叩いた」って

大騒ぎをした部分をぐいんぐいん引き伸ばし、

無言でしょうこちゃんの目の前に持って行くと、

しょうこちゃんもまた真実を知りました。

そして・・・

「いや～～～～～！　」

本日一番の雄たけびです。

私は笑い転げ、さっきまで馬鹿力で走っていたしょうこちゃんは、

ペッタリとその場にへたり込んで

焦点の合わない目で口を半開きで、うすら笑いをはじめました。

そして、ムックリ立ち上がると、私めがけて走ってきました。

その姿がゾンビより怖くて、金縛りになった私の前に仁王立ち。

「取って！　取って！　」を呪文のように連呼。

嫌だけど、友だちだからしょうがない。

二人は全速で走ってきた道を無言でトボトボ歩き、公園へ逆戻りしました。

そして私は、思いっきり水道の蛇口をひねり

しょうこちゃんのブラジャーが丸見えになるくらいTシャツをまくり上げ

「誰かが私の肩を叩いた！　」と、大騒ぎしやがったところに

ベッタリとこびり付いたハトの糞を、水洗いしてあげました。

「お前の肩をポンッと叩いたのは、ハトの糞じゃあ！　」

そう言って笑う私に

「おばけの方がよかった・・・」

しょうこちゃんも笑っていました。

教室から消えた・・・

受験シーズンが近づくと、思い出す事がある。

自分の受験ではなく、高校生になってからの

通っていた高校の受験日へのカウントダウンが始まる頃の事。

たっくさんの受験生がくるので、

紛失とかカンニングの疑いがかけられないようになのか、

在校生はすべての私物を受験日に学校に置いていてはいけないという

めんどくさい学校命令がくだるのだ。

私はもちろん、ほとんどの人が学校にたっくさんの私物を持ち込んでいる。

本(教科書やマンガ)・体操服・おやつ・おもちゃ・上履き

・いろんな種類の手紙類(学校とか友達とか異性とか)・答案用紙etc・・・

みんな机やロッカーの中は、めいっぱい物を詰め込んでいるから

も～たいへん！

だから一週間位前から下校時になると、みんなの手荷物が段々と増え始める。

同時に、教室やトイレの掃除用具、その他もろもろの隠せそうな

ありとあらゆる場所に私物を隠す生徒とねちっこく隅々まで探しまくる先生との

激しいバトルが毎年恒例で勃発されていた。

ー見つけた私物は容赦なく処分しますー

そんな御触書が出回ったて、私物を隠す生徒は後を絶たない。

誰かの隠した物が見つかった！　って話が

あちらこちらから聞こえてくる。

見つかった場所を聞くのは、大変参考になったっていうか

へぇ～！　よく隠したね～！　よく見つけたね～！　って

先生と生徒のいたちごっこに執念が垣間見える。

どちらも真剣勝負過ぎる緊迫した状態が受験日前日まで続くのだ。

しかし、私は偉かった。

日が迫るごとに、大幅にしぶしぶ＆イヤイヤ持って帰る生徒が増えても

私は、信念のない筋を通して私物は学校に置いたまま帰っていた。

まあ、先の事は考えないってだけなんだけど・・・。

机もロッカーもドラえもんのポケットみたいに

異次元空間なのだ。

はっきり言って、持って帰る物が多すぎて面倒くさい。

それに、持って帰ったらまた持って来ないといけないし・・・。

そうこうしているうちに、とうとう受験日前日になってしまった。

ほぼすべて空っぽな放課後の教室の中で、一人ポツンと残った私は

やっとこさ事の重大さに気がついた。

持ち出し不可能な大荷物たちも、どうするんだ！！！

と、私を責め立てる気がしてくる。

私にできることは、途方に暮れる事だけだった。

悪あがきもジタバタも、どんなにやっても時すでに遅し。

もう、先生はどんな風に怒るんだろう？

とか

私のかわいいこの子たち(私物)に、未来はあるのだろうか・・・。

とか

ポジティブシンキングの余地は１％もないと思われたが、

神は私をお見捨てにはならなかった。

泣きそうになる一歩手前で、天から啓示が降りてきた。

ーこんな人間は、私だけではないはず・・・ー

友人の顔が浮かんできた。

あいつ・・・しょうこちゃんだって

持って帰ってるわけがない。

教室でたった一人落ち込んでいた私は、

薄ら笑いを浮かべた。

まだ、しょうこちゃんに確認していないから

奴はどう対処したかは、わからない。

でも、チビな私とでかいあいつの見た目は、まるで違う。

でも、中身は同じ奴なのだ。

いろんな事でドングリの背比べをしていた。

常に五十歩百歩の関係だった。

まあ、五十歩と百歩の違いは大きい気がしてケンカもしたけど。

絶対に奴は私の期待を裏切らない。

そんな確信があった。

正確に言うと、物質的な確信はない。

絶対に絶対に奴は私の期待を裏切らない。

そう固く信じて、私は私物をどうするか考える前にしょうこちゃんを探す事にした。

教室を出てほんのちょっと歩いていただけで

すぐにしょうこちゃんは見つかった。

ノー天気な事に、私物を隠さずわが身を隠すかくれんぼの真っ最中。

隠れる場所を探して廊下を元気に走っていたのだ。

「しょうこ！　」

私はしょうこちゃんを見つけて喜んで名前を叫んだ。

そしたら、しょうこちゃんも私を見て喜んだ。

そして勢いよく私めがけて突進してくると、

「スカートの中に隠してくれ！　」と頼まれた。

念のため言っとくけど

私のスカートは別に足首まで長いわけじゃあない。

しょうこちゃんが私のスカートの中にもぐり込んだって

頭隠して尻隠さずっていう姿以上に変。

誰が見たって一目了然なんだけど

しょうこちゃんは、本気だった・・・

でも、その本気は正気か？　と尋ねることなく

私はそんな頼みは却下。完全無視した。

むこうは遊び、こっちは真剣。

それどころじゃないし、普段でも却下したと思う。

頼る相手を間違えたかもしんない・・・

そんな不安は、ない！　と強制的に思った。

かくれんぼがへたくそな事も考えない事にした。

だって、私にはこの人しかいないから。

だから、こんな人に私の運命を委ねた。

私はしょうこちゃんを教室に引きずり込んで

「ねえ、荷物は？」と尋ねると

「ああ」と、それだけ。

「ねえ、荷物ぅ。どうしたのぉ？」

私はしつこく聞き返した。

学校中が大騒ぎになって、みんなの私物がなくなったのに、

私のだけそっくりそのまま置いていたら

思春期の私が、今後どれだけこっ恥ずかしいさらし者になるか

怖くて想像すらできない。

私という人間にはありえないほど真剣に

「お願いします。お荷物をどうされたのか、教えてください～」

ただただ拝みまくった。

最後まで隠す事も持ちかえることもしなかった私だけど

しょうこちゃんから土下座しろとか３回まわってワン！って言えって言われたら

即！　行動したと思う。

言われなかったけど。

「ちょっと待ってて！　」

しょうこちゃんはそれだけ言って廊下に出ると、

「タ～イム！！！　」と、大声で叫んだ。

かくれんぼの方を抜けて私のために時間をさいてくださるためだが

かくれんぼをしてる友達に

意味が伝わったかどうか、ちょっとわからない。

そしてすぐに教室に戻って来て

「隠したよ！　」あっさり一言。

「どこへ？　」と尋ねる私。

だって、隠す場所なんかどっこにもない・・・

あまちゃんな隠し場所じゃ小心者の私は納得できない。

殺気だってる先生たちは、すでに人間の枠を超えてしまったくらい怖い。

先生たちのしらみつぶし的捜索大作戦は

警察犬なみに日々行われている。

きょうはその最終日。クライマックスなのだ。

力の入れようは尋常じゃないだろう。

きょう私物を隠す奴は、馬鹿か天才しかいない・・・。

「同じ所に隠させてあげるよ」

あっさり言ったしょうこちゃんは、

馬鹿なのだろうか？

それとも

天才なのだろうか？

今さらながら判断しかねる私。

しかし、しょうこちゃんは、のほほ～んと教室の前の方へ歩いて行くと、

私を手招きした。

わけもわからず吸い寄せられて行った私は、教壇のすれすれで立ち止まった。

「ちょっとそこ持って！　」と、しょうこちゃんからご指示があり

二人で、「いっせいのせっ！！！　」と言って持ちあげたのは

な～～～～～～んと、教壇だった。

ここでちょっと話がそれるが、昔教室には教壇というものがあった。

教室の前方にあるちょっとしたステージみたいで

生徒たちの机がある場所より一段高く

先生がそこに立って授業を行う定位置だった。

いつ頃なくなったかは知らないけれど、

以前(昔とは言わないよん)は、

どこの学校の教室にもあったんじゃないかな。

しょうこちゃんは一言

「ここ！　」それだけ言った。

私は、驚きと共に感動を覚えた。

しょうこちゃんは、想像を絶する天才だった。

教壇には人が大勢乗る。

だから頑丈にするために、持ちあげると内部は格子状に板が張り巡らされていた。

その格子の１マス１マスが「いらっしゃ～い！」と待っていてくれた。

そこの数マスを使って鎮座していた物に、見覚えがあった。

しょうこちゃんのうす汚い私物たちが輝いて見えた瞬間だった。

私はそんな先住の皆様を一切邪魔することなく

自分の物もまず床に置き、格子の板に挟まれないように最後まで見届けながら

静かに教壇を元に戻した。

私としょうこちゃんは高校時代の３年間、

受験前でも私物を持ちかえることは一切なかった。

先生たちは、教壇の上から教室を見まわし、隠しそうな場所を思案する事はあっても

教壇の下を確認する事は一度もなかった。

そして、幸運にも私物を隠す時の教壇を持ち上げる大胆な行動を見た人は・・・

だ～れも、いな～い！

お蔭様で、フツーの在校生の皆様には、受験日までのカウントダウンは

とっても面倒な数日間だっただろうけど

私は、まったく普段と変わらない日々を過ごす事ができた。

そしてこの時期、人の荷物を持ってあげる親切な女子高生を演じる事が出来たのは

しょうこちゃんと教壇のおかげだという事を

私は忘れない。

あれから何年も経って、私は結婚して子供を産んだ。

子供が成長し小学生になり、入学式の日に久しぶりに小学校の教室へ入った。

私の母校ではないけれど、教室に教壇のない事に衝撃を受けてしまった。

男女平等や市民平等みたく、先生と生徒も平等だから一段上にいる先生を

生徒と同じ位置にするために教壇をなくしたって説も聞いたことがある。

どんなお考えか知りませんが、教壇はなくしてほしくなかった。

机や黒板がなくなっても、教壇は残してほしかった。

だって私は、教壇の下にいっぱい荷物と思い出を詰めていたんだもん。

教壇に立つと極上の幸せを感じる事が出来たんだもん。

ここに一人、教壇の復活を望む者がいる事を忘れないでください。

じゃあ、あげるから家に持って帰れと言われたら・・・いらないけど。